

おわりに

著者	伊藤 敦規
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	137
ページ	131-132
発行年	2016-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00006111

おわりに

伊藤 敦規

国立民族学博物館

本ワークショップの開催を通じて、民博が展開していこうとするフォーラム型情報ミュージアムという協働カタログ制作プロジェクトの展望や課題が明確になった。

ズニ博物館はズニ語で「虹」を意味するアミドラネというプロジェクトを主導していた。これは世界各地の博物館に所蔵されたズニ資料をオンラインで架橋し、ズニ保留地に位置する地元の博物館で資料情報を一元管理する現在進行形のプロジェクトであった。かつてはアカデミアによる研究計画書の提出を前提とする資料熟覧しか認められていなかった状況を、先住民側から粘り強く交渉して改変し、博物館資料情報管理におけるソースコミュニティのプレゼンスを格段に引き上げることに成功した。具体的変化として、博物館が利用する異なるデータベースプログラムの統合的管理の提案、ソースコミュニティによる資料解説の提供、その解説の博物館へのフィードバック、ソースコミュニティでの利用の促進の四つを挙げることができる。

このプロジェクトは、連携する主流社会が運営する博物館へも強烈なインパクトも与えている。北アリゾナ博物館のブルーニグ館長が述べたように、「ソースコミュニティの判断に基づき、ソースコミュニティ内部の情報を外部の世界と共有するという史上初のプロジェクト」だったのである。これは先住民保留地に地理的に近い博物館にのみ該当するわけではない。これまでの収集者や研究者による代弁に基づく資料の解釈とは異なり、熟覧調査やその現地報告会を介してソースコミュニティのさまざまな経験や記憶や歴史や現在を反映した声（コメント）が集積するようになる。これまでの博物館側による解説よりもはるかに豊かな情報が集まり、モノが持つ意味の理解が大幅に深まる可能性を秘めているのである。

誤解のないようにいうと、この種の協働カタログ制作プロジェクトが目指すのは、博物館資料に対してソースコミュニティが唯一無二の「真正な」意味を授けるものではない。そうではなく、ソースコミュニティというモノを作り利用してきた人びとにある程度共有されるものの、そこでの多様な人びとによる多様な経験や思考の現れ的一端を知る機会であり、モノが持つ意味の広がりを知ることができるようなきっかけになることである。そしてこのことが、博物館を舞台とした異文化理解の促進だけでなく、ソースコミュニティにおける世代を超えた伝統文化の普及教育活動の一環として機能するのである。

民族誌資料を起点とするコミュニケーションの促進と、その結果としての双方向的な情報交流を目指してデザインしたのが民博のフォーラム型情報ミュージアムである。幸

い、本ワークショップの開催一ヶ月前に概算要求に対する特別経費が認められたという通知が民博に届いた。プロジェクト開始直前の絶妙なタイミングで本ワークショップを開催することができた。当初想定していた予算規模には届かず、8年間という時限的なものであるとはいえ、ワークショップ中に最大の懸念事項とされた予算確保という大きな問題がクリアできたのである。

展望の一つは、ズニ博物館や北アリゾナ博物館での取り組みに比べ、民博は収蔵する資料のソースコミュニティが世界規模に広がるため、この種のプロジェクトを実施する場合には、民博をハブとするコミュニケーションが世界規模に促進することである。2016(平成28)年2月現在では、プロジェクト数も増え、米国、台湾、オセアニア、韓国、徳之島(日本)、カナダといった地域でかつて収集され、現在では民博が収蔵している標本資料や映像音響資料を対象とした六つのプロジェクトが実施されている。それぞれ、博物館が収蔵した資料に関する情報の精査と、連携機関やソースコミュニティと共有するところから出発し、そこに研究者やソースコミュニティの見解を付加することによって、双方向的な情報の環流が生み出されつつある。換言すれば、僻地居住者や日本語話者ではなくとも、デジタルアーカイブ化と多言語化を実施することによって、民博や連携機関が所蔵する資料情報を地元でも閲覧が可能となり、自らのコメントを残すことができるオンライン協働カタログ環境を整備している最中である(データベース構築中)。また、筆者が担当している米国南西部先住民資料に関するプロジェクトでは、これまでの博物館側での情報記載や分類を見直し、ソースコミュニティの中に見られるさまざまな見解に基づく新たな記述や資料分類も資料情報管理に反映させようと試みている。これらはオクテイビアス・シオウテワ氏が危惧したように、誤記に基づく誤った民族表象の再生産をこれ以上進展させないための措置ともいえる。

もちろん連携する機関やソースコミュニティによって実行能力はさまざまである。そうした課題を抱えながらも、民博は2021(平成33)年度まで、フォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトを継続して実施する。アミドラネというズニ博物館が働きかける協働カタログ制作プロジェクトから学んだように、ソースコミュニティの発する言葉に耳を傾けることの社会的影響力は計り知れず、現在ますますその重要性を増している。本ワークショップを開催した2014年1月からすでに2年以上が経過した。その間に実施した他の国際ワークショップやプロジェクトの成果については、個別に出版していく予定である。また、シオウテワ氏が懸念していたような資料(画像)の公開非公開に関する適正化作業を経た後に、オフラインのビューアやオンラインのデータベースを介して協働カタログとしてのフォーラム型情報ミュージアムを公開していく予定である。